



# 上智大学グリーンケア研究所

## 2022



# ご挨拶



■ グリーフケア研究所  
所長 山岡 三治

かつて共に過ごした身近な人との別れはとてつらいものです。災害や事故、急死のような予期せざる死亡のときはとくにそうでしょう。いままで心の支えだったので、自分自身が削ぎ取られ、時間も止まった気持ちになったりします。どうしたらよいかもわからなくなるでしょう。

このような悲嘆(グリーフ)は、とらえかたにより、すべての人の人生にあるといえます。目標にしていた課題の挫折、プライドの崩壊などの重い喪失も長引く悲嘆をもたらすことがあります。そしてそれらに私たちがどうという考えや態度で接するかが、瞬間ごとに問われているといえましょう。それによって人生をより確かなものとする機会にもなりますし、自分だけでなく、さまざまな悲嘆に向き合い、つらい時を過ごしている人々とともに歩み、支援(グリーフケア)することによって共に二つとない確かな人生を歩めることとなります。

グリーフケアを学ぶには、自らの悲嘆の経験について振り返り、それがどのような意味をもつ経験だったかを捉え返す必要があります。それとともに、自らの経験の狭さや考えの及ばぬところを謙虚に振り返り、自省やケアを実践しながら学ぶ姿勢を身につけていくことも大切です。

人は悲嘆に向き合うことを通して成熟していくとも言えます。悲嘆に向き合うことはつらいけれども尊い経験でもあり、大きな力を得ていくことにもつながり、目に見えないものの領域に思いをこらすことも通じています。多くの人たちが深い悲しみを通して、新たな生きる力を得たことを語っています。

グリーフケアを学ぶことは、自らの心の支えを確かめていくことであり、死生観や宗教文化やアートの力について学んでいくことでもあります。人生のある段階で、これまで歩いてきた道を振り返り、これからの人生へ、また来るべき自らの死に備えるための学びともなるでしょう。



■ グリーフケア研究所  
名誉所長 高木 慶子

「悲嘆」について考えます時、多くの場合は、愛する家族や親せき、友人、恩人との死別体験者のことを考えますが、実は悲嘆状態は、狭義の意味では確かに死別による悲嘆状況が最も重い状態ですが、広義の意味では、只今の全世界中に恐怖と混乱をもたらしております新型コロナウイルス感染症やウクライナ情勢、また、天災、人災など、様々な出来事が、人々を悲嘆状況に陥れているのではないかと考えております。withコロナの時代がどのような状態になっているのか、また、ウクライナ情勢から、これからの世界はどのような方向に向かって行くのか、不安と恐怖をこの地球に住むすべての人々が抱えているのではないのでしょうか。その状態が悲嘆状態であると言えると考えます。つまり、悲嘆とは、各自にとって今までの生活では当たり前であり、大事にしていたことを喪失する体験であり、只今の世界状況では、それらのものを喪失するであろう出来事が続いていることへの不安と恐怖が人々を「悲嘆状態」にしているのではないかと考えております。

悲嘆はただに個人レベルの問題だけでなく、地球レベルでの悲嘆を考えなければならない時代になっていると考えます。今後の生活を考えるとき、これまでの概念や価値観が奪われるような経済や世界状況、それに生活様式さえ変えなければならないような生活形態になる時を想像するとき、大きな喪失体験を経験することとなります。このような課題を抱えている状態が、全世界の人々を不安にし、悲嘆状態にしているのではないかと考えます。只今の世界中の私たちは皆が悲嘆にあることを意識していることにより、生活の中でのイライラする感情が何によるのかが理解でき、自己理解と他者理解が深まり、人間関係も良好になると思います。人間関係が良好になることにより、世界中が平和となり、思いやりのある温厚な社会を実現し、それを築くことになるのではないかと考えます。

人は悲嘆状態にある時には、他者のことを考えることが難しく、自身が生きて行くだけでも大変な状況にあるのですから、共に思いやりと共感の感性を使って共生と共有の心を大事にして行きたいと願っております。そのためにも、「悲嘆」について学び考える機会を多く持ちたいと願います。そのことにより、誠の平和が訪れ、人々の生活も平穩に過ごせるのではないかと考え祈願いたしております。

# グリーフケアとは何か

## さまざまな喪失とその痛み

人生にはさまざまな喪失がつきまといます。なかでも大きな喪失は、家族や大切な人との死別です。特に、災害や事件・事故、あるいは自死など、予期せぬ形で突然にその死別がもたらされた場合には、受けとめきれないことの方が多いでしょう。もちろん、年月を経た闘病ののちの死別の場合にも、死別を予期しての悲嘆と、死別の苦しさがあります。また、死別以外にも、人生には、さまざまな喪失があります。

病気や怪我によって身体の一部・身体機能の一部を失った。  
失恋や離婚によってパートナーと別れた。友人を失った。  
伴侶や両親が認知症となった。  
家族が音信不通になった。  
老化により、体力や視覚・聴覚が衰えた。  
ペットを亡くした。  
転職や降格・昇格、退職やリストラにより、生きがい、仕事、社会的身分、自尊心を失った。  
スポーツ選手が引退を決意した。  
災害・事故・事件により住居や財産を失った。安全な、安心できる環境を失った。

大切な存在を亡くしたとき、愛する人がもうこの世にいないということ、あたりまえだと思っていた時間があたりまえではなかったことを突き付けられ、どうしようもない感情に襲われます。

また、戦争や災害や事件・事故では一度にたくさんの大切な人・ものが失われてしまうことがあります。一個人としてだけでなく、地域あるいは共同体全体や国家のレベルでも喪失を体験します。

このような大きな喪失に伴う、心理的・身体的・社会的・スピリチュアルな反応、全人的な痛みを「悲嘆（グリーフ）」と呼びます。

## 「グリーフ」とは

「グリーフ（悲嘆、Grief）」とは、さまざまな「喪失」、すなわち、自分にとって大切な人やもの、事柄など、何かを失うことによって起こる反応のことで、深い悲しみ、悲嘆、苦悩を意味する言葉です。

自分の思い通りの人生を送ることができる人は、誰一人としていません。充実した人生を送った人でも、やがて年老いて、病を得て、そして死に至ります。かけがえのない人とも、必ず別れなければならない日がやって来ます。死を運命づけられている人間にとって、重要な何かを喪失することで生じるグリーフは、誰しもが経験せざるを得ないという意味で、自然なものともいえます。

グリーフの現れ方やグリーフの強さは、人によってさまざまとなります。また、グリーフは、「悲しい」という感情だけにとどまりません。戸惑いや抑うつ、怒りという形さえもとりまじり、対人関係の混乱や、ときに仕事依存などの躁的な反応で、見かけ上は「立ち直った」と誤解されてしまうこともあります。「全人的な痛み」としかいいようのないものです。

1998年、世界保健機関（WHO）は、健康の定義を再吟味し、「身体的（physical）」、「精神的（mental）」、「社会的（social）」の3領域に加え、「スピリチュアル（spiritual）」な領域についても、健康をとらえることを提案しました。人が健康であるためには、この4つの領域をケアしていくことが大切であるといえます。また、さまざまな喪失によってグリーフ（悲嘆）が生み出されたとき、人は、身体的領域、精神的領域、社会的領域、そしてスピリチュアルな領域の4つで、全人的に痛みを味わうと考えられます。

#### 世界保健機関（WHO）の健康の定義の提案



グリーフを受けると、たとえば、身体領域では、極度の疲労、頭痛や不眠、食欲不振や持病の悪化、その他のさまざまな肉体的変調をきたすことがあります。精神領域では、悲しみや怒り、罪悪感や自責の念、孤独感や疎外感、抑うつあるいは躁状態、アルコールや薬物への依存や過剰な行動への耽溺などを生じることがあります。また、社会領域では、家庭内の役割や社会的立場の変化、対人関係の混乱、ギャンブルへの耽溺や自暴自棄な浪費などの形を取ることもあります。

人は、誰もスピリチュアリティを持っています。スピリチュアリティという言葉には、適当な日本語訳がなく、専門家のあいだでも定義が固まっていません。一般的には「精神性」、「宗教性」、「霊性」などと訳されておりますので、“人が人として生きる味わい、人間を人間たらしめる働き”などと考えることもできるでしょう。

何らかの喪失を体験してグリーフ（悲嘆）を抱えたとき——に、この“人が人として生きる味わい、人間を人間たらしめる働き”——スピリチュアリティ——が、見失われることがあります。

「喪失」を取り戻すことはできません。時間は戻らず、かけがえのないものに代わりはありません。とはいえ、生活を「回復」していく道がないわけではありません。身体的、精神的、社会的、そしてスピリチュアルな領域のそれぞれにおいて、失われたもののかけがえなさを、そばにいる人に一緒に確認してもらい、回復のお手伝いをしてもらうことはできます。

グリーフケアとは、「喪失」を体験し、全人的、特にスピリチュアルな痛みを抱えた方々に心を寄せて、寄り添い、ありのままに受け入れて、その方々の回復や成長、希望を支援することです。

## グリーフケアの必要性の高まり —現代日本人の死への恐れ—

日本社会の近年の変化は、死別の苦しみや痛みを人々がどう受け止めるかも変えました。これまで地域社会や伝統文化があたりまえに担ってきたグリーフケアの機能は失われつつあります。

人生のさまざまな苦悩や悲嘆に対して、宗教的な説明や手当てを期待しない人は以前からいました。伝統的な宗教は現在も残っていますが、現代の生老病死の現場にはその影響力は届きにくくなっています。故人を思い出し、悼み、遺族との関係を再強化する営みでもあった葬送儀礼は形骸化してしまい、できるだけ簡素にしたいと考える人も多くなっています。

戦後、多くの人々が大都市に移り住み、単身世帯や核家族中心の世帯が圧倒的多数を占めるようになり、遠方に通勤する人々は近所づきあいを重んじなくなりました。一方、就業機会が減少している地方都市では若年層の比率が下がり、結果として、地方都市でも地域社会の支援が難しくなっています。高齢者が更なる高齢者を介護する「老老介護」には限界があり、独居高齢者の孤独死も少なくありません。

医学の進歩はさまざまな結果をもたらしました。多くの病気が治療可能になり、長い人生を楽しめる人が増えた現在、日本は他に類を見ない超高齢化社会を迎えています。職場復帰できるがん患者も多くなりましたが、再発の不安は残りますし、社会的立場の変化もあります。残り時間を慮っての予期悲嘆など、患者や家族の痛みは消えるわけではありません。

1970年代以降、自宅よりも病院で亡くなる人が多くなり、近親者の死を身近に経験する機会、死と向き合

う機会は少なくなりました。現代の多くの日本人は、年長者が死に向きあう姿、死にゆく人と関わる姿を知らないまま、自分自身や大切な人の死に対して、しばしば一人で向き合わねばなりません。

現代は一人ひとりが、自らの生きがいを求める時代、人間らしい死に方を求める時代でもあります。「終活」と呼ばれる、人生の締めくくりに模索が広がっています。延命に関わるたくさんの難しい選択も求められます。選択した結果を、あとから後悔することも少なくありません。

死は、人間の理解を超え、コントロールできないものです。自分自身や家族の病気や死去などで、当たり前と思っていた生活はあっという間に崩壊します。また、地震、台風、大雨などの自然災害、無差別の殺傷事件、自動車、鉄道、航空などの交通機関の事故などによって、全く予期せぬ形で、日常生活や地域社会が崩壊してしまうこともあります。予期せぬ死に対して、なぜという答えようのない疑問、あの日こうしていればという際限ない後悔や自責が生まれます。

現代社会は、科学的合理性と経済性を追求する社会です。社会は常に発展し、努力すれば誰もが願いを叶えられると信じられている社会でもあります。人間にとって死は逃れられないものであるのですが、現代日本社会は、死について考えるのを避けるようになってしまっています。このため、現代日本人は、死やさまざまな喪失を受け入れる準備、予期し得ない事態にうまく対応する準備が十分にできていないのです。

### 現代日本社会でグリーフケアの必要性が高まる理由

#### 死生観の空洞化

伝統宗教の衰退  
葬送儀礼の形骸化  
終活の模索

#### 地域社会の弱体化

独居世帯・核家族世帯の増加  
地方都市の若年層減少  
老老介護、孤独死

#### 医学や科学の進歩

超高齢化社会  
最善の選択の模索  
予期悲嘆や再発の不安

#### 死や喪失への準備不足

科学と経済を優先する社会  
死を考えない社会  
予期せぬ事態への準備不足

## グリーフケアを届けたい現場・グリーフケアを必要とする現場

### 【医療の現場】

人間らしい人生の締めくくり方を求める患者の方々やそのご家族（ご遺族）、在宅医療の現場、また、手を尽くされた医師や看護師などの医療スタッフにグリーフケアを届けたいと願います。

### 【災害の現場】

地震や台風など、大きな災害で苦しむ方々に、形ある物とともに、形のないグリーフケアを届けたいと願います。

### 【事件や事故の現場】

鉄道や航空の重大事故や自動車事故あるいは犯罪により予期せぬ形で家族と死別した方、生活の基盤を奪われた方のごとくに、グリーフケアを届けたいと願います。

### 【福祉や介護の現場】

福祉施設やご自宅での介護の現場で、ご本人やご家族にグリーフケアを届けたいと願います。

### 【自死遺族】

自死による死別で残された遺族は、自責の念や罪の意識、周囲の視線への意識などに苦しんでいます。そこにグリーフケアを届けたいと願います。

### 【葬儀】

葬儀は、故人の生き方を確認し、故人を偲ぶ、大切なグリーフケアの場です。遺族や参列者に寄り添うものとして、あるいは葬儀を司式する宗教者や葬儀をお手伝いする葬儀社のスタッフとして、グリーフケアを届けたいと願います。

### 【日常】

私たちの日常は、大小さまざまな喪失に満ちています。ケアの専門職ではないとしても、職場や地域社会あるいは日常生活で、痛みをかかえる人のそばにいて、できる人を育てて、そこにグリーフケアを届けたいと願います。

## グリーフケアを担う人々

東日本大震災以降、宗教者が担うべきケアが広く期待されるようになってきています。

臨床宗教師は、布教・伝道を目的とせず、相手の価値観、人生観、信仰を尊重しながら、宗教者としての経験を活かして、被災地や医療機関、福祉施設などで、苦悩や悲嘆を抱える人々に寄り添う宗教者です。

西洋では、教会のほか、医療機関や福祉施設などの非宗教的な施設や組織にも身を置いて働く聖職者を「チャプレン」といい、患者（利用者）、家族、スタッフの、心理的、宗教的、スピリチュアルなニーズを支援してきた歴史があります。我が国でもチャプレンやビハーラ僧を置く病院が増えつつあります。

また、人間らしい終末期を求める緩和医療、在宅医療、救命救急医療などの医療機関に勤務する医師や看護師、さまざまな福祉や介護の現場のスタッフ、教員やカウンセラーなど教育機関のスタッフ、被害者のケアにあたる警察官や消防署員、あるいは葬祭業者など、悲嘆を抱えた方々に接する専門職が、自らの職務を通してグリーフケアを実践しています。

さらに、ボランティアとして、医療・福祉等の現場、事件・事故あるいは災害等の現場、その他さまざまな現場において、グリーフを抱えた方々に寄り添い耳を傾けることで、ケアを行う方や、遺族会や患者会などでファシリテーションを行う方なども多数おられます。

## グリーフケア人材の養成と資格

グリーフケアへの関心の高まりとともに、さまざまな団体や個人が、グリーフケア、あるいはスピリチュアルケアの従事者のための教育プログラムや研修会・講習会を開催するようになってきました。

これらの中で、最も組織的かつ体系的に教育プログラムを展開しているのは、一般社団法人日本スピリチュアルケア学会と一般社団法人日本臨床宗教師会です。また、上智大学グリーフケア研究所も、独自資格を付与しています。

## 【一般社団法人日本スピリチュアルケア学会による「スピリチュアルケア師」について】

一般社団法人日本スピリチュアルケア学会は、同学会の独自資格である「スピリチュアルケア師」の認定制度を設けています。

スピリチュアルケア師とは、医療・福祉・教育・産業などのさまざまな分野で、当該分野の専門職と連携して、スピリチュアルケアを行う専門職で、同学会は、その役割に応じて、「臨床スピリチュアルケア師」、「専門スピリチュアルケア師」、「指導スピリチュアルケア師」の3つの区分を設けています。

スピリチュアルケア師の認定制度は2013年度にスタートしました。2022年現在、全国に9つの養成機関があり、臨床・専門・指導の3つの資格が約400名の方に付与されています。

なお、これらの資格は、5年ごとに更新が必要であり、5年間の間に学会が定める基準に合致しないと更新が認められません。

グリーンケア研究所が開講する「グリーンケア人材養成課程（2年制）」を経て「資格認定課程」（1年制）の所定の単位を修得し、総合審査に合格した方は、同学会が認定する「臨床スピリチュアルケア師」審査の受験資格を得ることができます。

また、「臨床スピリチュアルケア師」の有資格者で、グリーンケア人材養成講座専門課程（1年制）の所定の単位を修得し、総合審査に合格した方は、同学会が認定する「専門スピリチュアルケア師」の受験資格を得ることができます。

## 【一般社団法人日本臨床宗教師会による「認定臨床宗教師」について】

一般社団法人日本臨床宗教師会は、同会の独自資格である「認定臨床宗教師」の認定制度を設けています。

臨床宗教師とは、被災地や地域社会、あるいは医療機関、福祉施設などの公共空間で心のケアを提供する宗教者で、欧米のチャプレンに対応するものです。英訳はinterfaith chaplain（宗教宗派を超えたチャプレン）。宗教者が自らの宗教宗派の布教や伝道を目的とせず、相手の価値観、人生観、信仰あるいは無宗教などの立場を尊重しながら、宗教者としての経験を活かして、苦悩や悲嘆を抱える人々に寄り添い、さまざまな専門職とのチームケアに参加します。宗教者として全存在をかけて、人々の苦悩や悲嘆に向きあい、かけがえのない方の物語をあるがまま受けとめ、そこから感じ取られる価値観やスピリチュアリティを尊重してケアを行う専門家です。

臨床宗教師の呼称は、チャプレン、ビハーラ僧、パストラルケアワーカー等のさまざまな呼び名を包括して、宗教宗派を超えての宗教者の協力への願いが込められて

おります。仏教、キリスト教、神道など、さまざまな信仰を持つ宗教者が協力し合い、2016年2月、「日本臨床宗教師会」が設立され、2017年2月、「一般社団法人日本臨床宗教師会」として法人登記されました。2021年現在、指導者を含めて、225名の方が認定臨床宗教師の資格を得ています。

同会は、臨床宗教師を養成するためのカリキュラムを定め、同会が認定する養成機関で所定の教育プログラムを履修し、養成機関から推薦を得た宗教者を対象に資格審査を行い、認定しています。同会が認定する臨床宗教師養成機関は9団体あり、上智大学グリーンケア研究所もその1つです。

上智大学グリーンケア研究所が開講する「グリーンケア人材養成課程（2年制）」を経て「資格認定課程」（1年制）の所定の単位を修得し、総合審査に合格した方で、かつ、宗教者の資格を有する方は、「認定臨床宗教師」の資格取得申請を行うことができます。

## 【上智大学グリーンケア研究所認定臨床傾聴士】

上智大学グリーンケア研究所では、「グリーンケア人材養成課程」（2年制）の所定の単位を修得し、総合審査に合格した修了者に、上智大学の独自資格である「上智大学グリーンケア研究所認定臨床傾聴士」を付与しています。

グリーンケア、スピリチュアルケアにおいて、ケア提供者の役割は、グリーン（悲嘆）やスピリチュアルな痛みを抱えた方に寄り添い、そして、その方の思いに耳を傾けることにあります。「臨床傾聴士」の名称は、「寄り添い」と「傾聴」の重要性によるものです。

# 上智大学グリーフケア研究所について

## 研究所設立の経緯

グリーフケア研究所は、グリーフケアの必要性の高まりを受けて、日本で初めてグリーフケアを専門とした教育研究機関として、2009年4月に設立されました。

2005年4月25日にJR西日本の福知山線で発生した列車脱線事故の教訓を生かし、社会に役立つ取り組みの一環として、事故のご遺族の方々をはじめとした悲嘆者に対するグリーフケアを実践するために役立つことを目的に、JR西日本及び公益財団法人JR西日本あんしん社会財団の全面的なご支援により、公開講座「悲嘆について学ぶ」、そしてグリーフケアの実践を遂行できる専門的な知識・援助技術を備えた人材を育成するグリーフケア人材養成講座を開講しました。

2010年4月、グリーフケア研究所は上智大学に移管され、上智大学大阪サテライトキャンパス(大阪市北区)と東京の四谷キャンパスの2ヶ所で活動しています。

上智大学の教育精神は、「For Others, With Others」(他者のために他者とともに生きる人間を育成する)ことにあり、学問研究及び社会貢献を通じて、「人間の尊厳 (human dignity)」を脅かす課題——貧困、環境、教育、倫理——の解決に貢献することを使命としています。

グリーフケア研究所は、上智大学の附置研究所の一つですが、グリーフケア、スピリチュアルケアにかかわる調査研究のみならず、グリーフケアの実践を遂行できる専門的な知識・援助技術を備えた人材を養成し、我が国におけるグリーフケアの理解・啓発を行い、グリーフを抱える者「悲嘆者」がケアされる健全な社会の構築に貢献することを目的として活動しています。

## 研究所の年譜

2009年4月	聖トマス大学に「日本グリーフケア研究所」を設立 「グリーフケア人材養成講座」を聖トマス大学にて開講 グリーフケア公開講座「悲嘆について学ぶ」を聖トマス大学にて開講
2010年4月	「上智大学グリーフケア研究所」として上智大学に移管
2010年10月	グリーフケア公開講座「悲嘆について学ぶ」を上智大学東京四谷キャンパスにて開講
2011年2月	グリーフケア公開講座「悲嘆について学ぶ」(聖トマス大学)を閉講
2011年4月	上智大学大阪サテライトキャンパスの開設に伴い、 「グリーフケア人材養成講座」の一部を、大阪サテライトキャンパスにて開講
2012年4月	「グリーフケア人材養成講座」をすべて上智大学大阪サテライトキャンパスにて開講
2014年4月	東京四谷キャンパスにて、「グリーフケア人材養成講座」を開講 グリーフケア人材養成講座の課程・カリキュラムを改訂し、 「認定課程(基礎コース・臨床コース)」を開講
2016年5月	龍谷大学人間・科学・宗教オープン・リサーチ・センターとの共催により、 京都にて公開講座「悲しみを生き抜く力」を開講
2017年4月	グリーフケア人材養成講座の課程・カリキュラムを改訂し、 「グリーフケア人材養成課程」(2年制)を開講
2017年5月	龍谷大学人間・科学・宗教オープン・リサーチ・センターとの共催により、 グリーフケア公開講座「悲嘆について学ぶ」を大阪サテライトキャンパスにて開講
2018年4月	「専門課程」(1年制)を開講
2019年4月	「資格認定課程」(1年制)を開講

## 研究所の主な活動

### ◆ グリーフケア人材養成講座

関西では、2009年（平成21年）4月から、東京では、2014年（平成26年）4月から、グリーフケア人材養成講座を開講しており、これまでに、大阪、東京を合わせて約700名の修了生を送り出しています。

グリーフケア人材養成講座の受講生は、医師、看護師、福祉職、教育職、カウンセラー、宗教職などの援助職

に従事しながら、ケア提供者として知識技術を向上させようとする方々や、自らの喪失体験を契機として、遺族会や病院その他の施設でボランティア活動をすべく、グリーフケア、スピリチュアルケアについて深く学ぼうとする方々が多数います。現在、3つの課程を開設しています。

#### グリーフケア人材養成課程（2年制）

定員：東京48名 大阪36名

文部科学大臣より「職業実践力育成プログラム（BP）」の認定を受けた課程です。また、厚生労働大臣より「専門実践教育訓練給付金制度」に認定された課程でもあります。

2年間に18科目30単位、合計350時間余りの講座を受講します。所定の単位を修得し、総合審査に合格した方には、上智大学グリーフケア研究所が認定する「臨床傾聴士」の資格を付与します。

#### 資格認定課程（1年制）

定員：東京18名 大阪12名

文部科学省の「履修証明プログラム」の課程です。

「グリーフケア人材養成課程」の修了者を対象とした課程です。1年間に12科目18単位、合計200時間余りの講座を受講します。所定の単位を修得し、総合審査に合格した方は、日本スピリチュアルケア学会が認定する「臨床スピリチュアルケア師」の受験資格を得ることができます。

#### 専門課程（1年制）

定員：東京14名 大阪7名

文部科学省の「履修証明プログラム」の課程です。

日本スピリチュアルケア学会が認定する「臨床スピリチュアルケア師」の資格を有している方を対象とした課程です。1年間に8科目16単位、合計160時間余りの講座を受講します。所定の単位を修得し、総合審査に合格した方は、日本スピリチュアルケア学会が認定する「専門スピリチュアルケア師」の受験資格を得ることができます。

### ❖ 養成する人材像

上智大学の教育精神、“For Others, With Others - 他者のために、他者とともに生きる者”に基づき、死生学を基盤とし、さまざまな喪失によるグリーフ（悲嘆）を抱える個人や共同体に対して、スピリチュアルケアを提供できる人材の養成を目指します。

グリーフを抱える個人や共同体が持っている死生観やスピリチュアリティの多様性を前提として、スピリチュアルな課題（スピリチュアルペイン）に直面している悲嘆者に対し、ケア対象者・ケア提供者が共に各自の死生観・スピリチュアリティを十全に生き共存できるケア関係の構築を目指し、深い臨床理解とダイナミックなケア実践ができる人材を養成します。

具体的には、医療、保健、社会福祉、介護、教育、宗教活動、その他、臨床の現場での対人援助の専門職としての活動において、グリーフケア、スピリチュアルケアを提供できる人材、あるいは、遺族会・患者会等のサポートグループのファシリテーション、ケア提供者のピアケアのリーダーシップを取れる人材を養成します。また、ボランティアとして、医療・福祉等の現場、事件・事故あるいは災害等の現場、その他さまざまな現場において、グリーフ（悲嘆）を抱えた方々に寄り添い、耳を傾けることで、ケアを行うことができる人材を養成します。

### ❖ 修了生の活動

#### 【修了後の活動】

グリーフケア人材養成講座の受講生のうち、医療、保健、社会福祉、介護、教育、宗教活動、その他、臨床の現場において「対人援助職」に従事している方は、修了後、職務を通してグリーフケア、スピリチュアルケアを実践することが期待されます。

実習を受講した際の実習機関に、引き続き修了後もボランティアとして活動する方、既存の遺族会やボランティア団体で活動される方、あるいは新たにNPO法人等を設立して、グリーフケア、スピリチュアルケアの活動を開始される方もいます。

また、グリーフケア、スピリチュアルケアについてさらに研鑽を深めるべく、上智大学大学院実践宗教学研究科死生学専攻をはじめ、大学院に進学する修了生も多数います。

#### 【グリーフケア研究所による修了生へのフォローアップ】

グリーフケア研究所では、グリーフケア人材養成講座の修了生のための講演会の開催や研究・実践活動の報告の場の提供、また修了生同士のコミュニケーションを支援するなど、修了生がさらに研鑽を積むことができるよう支援しています。

## ◆公開講座「悲嘆について学ぶ」

2010年10月より、春期と秋期の年2回、東京四谷キャンパスで、公開講座「悲嘆について学ぶ」(各期、全10回)を開講しています。また、2017年度より、春期と秋期の年2回、大阪サテライトキャンパスでも公開講座「悲嘆について学ぶ」(各期、全8回)を開講しています。(2020年度からは新型コロナウイルスの影響により、オンラインで開講しています。)

この公開講座は、さまざまな分野や現場で活躍をされておられる方を講師として招いて、その経験をうかがい、事件や事故、災害、病気などで愛する人を亡くした方々の悲しみや苦しみに共感し、ともに歩むための方策を考えることを目的としています。

## ◆受託事業・協力事業

グリーンケア研究所では、国や地方公共団体、企業等からの依頼により、グリーンケア、スピリチュアルケアに関する研修会に講師を派遣しています。

たとえば、兵庫県の「ひょうごいのちとこころを支える相談職員養成研修会」や、岩手県大船渡市の「グリーンケアセミナー」を受託事業として実施しています。また、協力事業として、栃木県足利市の「The あしがが学」に講師を派遣しています。

2014年からは、毎年、自動車事故等の被害者やご遺族を対象とした研修会を開催しています。

また、2012年、2013年、2017年には、東日本大震災の一回忌、三回忌および七回忌にあたって、「東日本大震災追悼の集い」を開催しています。

なお、定期的に開催する公開講座とは別に、学内外の諸団体との共催、あるいはグリーンケア研究所の単独開催により、講演会やシンポジウムを開催しています。

## ◆刊行物

グリーンケア研究所の研究紀要として『グリーンケア』誌を、毎年度刊行しています。「上智大学学術情報リポジトリ」で閲覧できます。

また、研究所の取り組みの成果として、『グリーンケア入門』(編著:高木慶子、上智大学グリーンケア研究所、2012年4月 勁草書房)、『〈悲嘆〉と向き合い、ケアする社会をめざして—JR西日本福知山線事故遺族の

手記とグリーンケア—』(編著:高木慶子、上智大学グリーンケア研究所、柳田邦男 2013年2月 平凡社)、『悲嘆の中にある人に心を寄せて 一人は悲しみとどう向かい合っていくのか—』(編著:高木慶子、山本佳世子 2014年3月 上智大学出版・ぎょうせい)、『ともに悲嘆を生きる』(著:島菌進 2019年5月 朝日選書)などを刊行しています。

## ◆他大学との連携

グリーンケア、スピリチュアルケアに従事するケア者を養成する教育プログラムを有する大学の教育研究機関と相互交流を図り、公開講座や講演会の開催、教員・指導者の交流により、教育プログラムの充実改善を図っています。

## ◆新型コロナウイルスへの対応について

2020年度から、グリーンケア研究所が開講する人材養成講座および公開講座では、新型コロナウイルス感染予防の観点から、オンラインでの講義を行いました。オンラインならではのケアのあり方も学べるように工夫したカリキュラムを展開しております。

## ◆これからのグリーフケア研究所

2016年度に上智大学大学院実践宗教学研究科死生学専攻修士課程を開設、2018年度には、同研究科同専攻に博士後期課程を開設し、2021年3月には、研究科としてはじめて、3名の方に博士号の学位を授与しました。

実践宗教学研究科死生学専攻は、グリーフケア研究所におけるグリーフケア、スピリチュアルケアに関する研究とグリーフケア人材養成講座の実績を基盤としていますが、臨床スピリチュアルケアを中心とした実践的な関心に基づく死生学と、現代社会で生じるさまざまな問題に対して、宗教文化や倫理思想的伝統を踏まえて対応する実践宗教学の展開を目指しています。

グリーフケア人材養成講座を修了された方で、自身の学知の深化のみならず社会において高度専門職としての活躍をこころざし、上記大学院に進学する方もおられます。

グリーフケア研究所は、大学院実践宗教学研究科死生学専攻と密接に連携しながら、「宗教と公共性、宗教間対話・宗教協力」、「死生観、医療現場・先端科学技術の倫理」、「いのち・平和・環境をめぐる価値観」、「医療・福祉・教育におけるスピリチュアルケア及び災害・事故・事件・自死に関わるグリーフケア」を課題として、グリーフケアにかかる人材の養成と啓発活動に一層の力を注いでいく所存です。

人は、誰しも近親者や友人知人を亡くす経験をします。近親者や友人知人との死別に限らず、さまざまな悲嘆を抱えた方は多数おられますし、自分自身もまた、いつか悲嘆者となるかもしれません。

悲嘆者と共に生きる社会、互いに支えあう社会の構築を、ご一緒に目指しましょう。

## ◆研究所の構成員

(2022年4月1日現在)

職名	氏名	所属等	職名	氏名	所属等
所 長	山岡 三治	上智大学グリーフケア研究所所長、カトリックイエズス会司祭	客員所員	伊藤 高章	立正佼成会附属佼成病院チャプレン
名誉所長	高木 慶子	生と死を考える会全国協議会会長、カトリック援助修道会修道女	客員所員	大柴 譲治	日本福音ルーテル大阪教会牧師、社会福祉法人うてるホーム理事長・チャプレン、日本福音ルーテル教会総会議長
副 所 長	浜渦 辰二	上智大学グリーフケア研究所特任教授	客員所員	大橋 容一郎	上智大学名誉教授
副 所 長	西平 直	上智大学グリーフケア研究所特任教授	客員所員	岡村 毅	東京都健康長寿医療センター研究所 副部長
副所長補佐	篠田 美香	上智大学グリーフケア研究所副所長補佐	客員所員	柿森 千草	学校法人聖路加国際大学聖路加国際病院相談員
所 員	栗原 幸江	上智大学グリーフケア研究所特任教授	客員所員	柏木 哲夫	淀川キリスト教病院名誉ホスピス長、大阪大学名誉教授、ホスピス財団理事長
所 員	葛西 賢太	上智大学大学院実践宗教学研究科教授	客員所員	加藤 眞三	慶応義塾大学名誉教授、東海大学医学部非常勤講師
所 員	佐藤 啓介	上智大学大学院実践宗教学研究科教授	客員所員	鎌田 東二	京都大学名誉教授
所 員	寺尾 寿芳	上智大学大学院実践宗教学研究科教授	客員所員	窪寺 俊之	兵庫大学大学院特任教授
所 員	武田 なほみ	上智大学神学部神学科教授	客員所員	島 蘭 進	東京大学名誉教授
所 員	原 敬子	上智大学神学部神学科准教授	客員所員	土居 由美	上智大学・白百合女子大学非常勤講師、立教大学兼任講師
所 員	酒井 陽介	上智大学神学部神学科准教授	客員所員	西岡 秀爾	崇禪寺副住職、公益財団法人中村元東方研究所東方学院講師
所 員	鈴木 伸国	上智大学文学部哲学科准教授	客員所員	ベッカー, カール	京都大学 政策のための科学ユニット 特任教授
所 員	横山 恭子	上智大学総合人間科学部心理学教授	客員所員	松田 真理子	京都文教大学臨床心理学部教授、心理臨床センター長・学生相談室長
所 員	高山 恵理子	上智大学総合人間科学部社会福祉学科教授	客員所員	松本 信愛	医療法人ガラシア会常務理事、ガラシア病院チャプレン
所 員	三次 真理	上智大学総合人間科学部看護学科准教授	客員所員	水嶋 章郎	順天堂大学大学院医学研究科緩和医療学教授、順天堂病院緩和ケアセンター長
所 員	浅見 昇吾	上智大学外国語学部ドイツ語学教授	客員所員	水谷 修	水谷青少年問題研究所所長
特別研究員	秋丸 知貴		客員所員	森 清頭	清水寺執事補、泰産寺住職
研究補助員	川窪 彩乃				
研究補助員	西脇 大成				



## 上智大学グリーフケア研究所

### ■ 東京・四谷キャンパス

〒102-8554 千代田区紀尾井町 7-1  
電話 03 (3238) 3776 FAX 03 (3238) 4661  
E-mail : [griefcare@sophia.ac.jp](mailto:griefcare@sophia.ac.jp)

### ■ 大阪サテライトキャンパス

〒531-0072 大阪市北区豊崎 3-12-8  
サクラファミリア 2階  
電話 06 (6450) 8651 FAX 06 (6450) 8652  
E-mail : [i-grief@sophia.ac.jp](mailto:i-grief@sophia.ac.jp)